

死にゆく人々への牧会配慮^①

窪 寺 俊 之

一 序 論

最近、「死」への関心が高まり、末期患者への看護や、死ぬ権利等が問題になっている。^② 一般的関心はもちろんのこと、専門家たちの死に関する関心も高まりつつある。^③

死は医学的には、「生の終り」に過ぎないが、死にゆく人々にとっては、多くの哲学的・宗教的問題を投げかけ、かつ家庭的・社会的・経済的な問題を引き起こしていく。

この小論では、死にゆく人々への牧会配慮を取り上げ、最近の死にゆく人々への関心をたどりつつ、牧会者としての在り方と責任を明らかにしたい。^④

ガンの末期患者の日記や手紙^⑤、遺族による病床記録の刊行^⑥、末期患者のためのホスピス運動^⑦、死の臨床研究会の発足^⑧など多方面からの活動がなされはじめている。

現代死を迎える人々は、昔の死の迎え方と異なってきており、死にゆく人々への牧会を考える場合に、この違いを考慮しなくてはならなくなっている。まず、現代は死を否定する文化である。^⑨ 現代は「能力主義」という言葉が象徴

するように能力が尊ばれる時代である。生産能力を失った者には、価値を認めようとする傾向がある。教会の中でも、死について語ることはタブー視され、積極的に死について語り合ったり、死への備えをすることがない。その結果は、死が間近かに迫って、家族や回りの者が、病人に真実を告げるべきか否かで悩み苦しむ。ガンの末期患者が自分の病名を知らずに死んでいくことも、日本では珍らしくない^⑩。病人の死後、家族をはじめ、看護にたずさわった人が後ろめたい思いを持つこともしばしばである。日本でも末期ガン患者に病名をつけるべきか否かについては色々議論がなされている。我が国では、欧米に比べて一般的に病名を知らせない傾向が強いようである。このような傾向の背景には死を否定する文化があることは事実である。

また、死がほとんど「非人間化」した状況の中で起るのも、現代の特徴の一つである。「死の非人間化」と呼ぶもののである。今日では病人の希望に反して、60〜70%の人が病院や施設で死を迎えている^⑪。親しい肉親と別れ、住み慣れた家とも別れて、全く未知の環境の中に入り、そこで死を迎えることは、たとえ、最新の医療設備があったとしても、死への恐怖や不安を取り去るものとならず、かえって増す要因にしかならない。

結局、現代の人間は死を否定しつつ非人間化した状況の中で死を迎えているといえる。

さて、「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」(ヘブル9・27)と聖書は述べ、死は否定できない人間の現実であることを認めている^⑫。ゆえに、現代文化のように死を否定した文化は、死への真の解決を持つとは言えない。同様に、死を否定したり、無視したいかなる宗教も思想も取るに足りない。死という人間の現実をしっかりと見据えつつ、キリストの十字架と復活の事実を信じ、永遠の生命を望んで死に勝利していくことこそ、聖書の生き方である^⑬。それは死を無視しての虚勢でもないし、死の恐怖にとらわれた自暴自棄でもない。死の現実を認める中で、慈愛あふれる神の御臨在を信じつつ、永遠の生命の喜びに満されつつ、自からを全能なる神にゆだねていく生き方である^⑭。

二 死に対する人々の態度と願わしい死の在り方

死にゆく人々ほどの様な態度で死を迎えていくのだろうか。死にゆく人々の心理を明らかにした研究として特筆すべきものは、元シカゴ大学精神医学部教授のE・キューブラー・ロスの研究である。キューブラー・ロスがとった研究法は、死にゆく患者自身に直接面接して患者の気持ちを率直に語ってもらうものであった。その結果からまとめられたのが、死の受容への五段階である^⑮。その五段階とは、次のようなものである。第一段階、否認、「違います、ぼくは違います」。第二段階、怒り、「なぜ私がならなければならないのか、なぜ私が……」。第三段階、取り引き、「もし私がおとなしくしていれば……」。第四段階、抑うつ、「どうしようもない」。第五段階、受容、「静かにしたい、ひとりでいたい」。この五つの段階をすべて通って死にいたるわけではない。死を否定しつつ死に至る人もいる。しかし、死を受容し静かに召されていくことは望ましい姿といえる。D・D・ウィリアムズは、死にゆく人々がとる態度を四つあげている^⑯。第一は、死にたくないという態度。第二は、死にたいという態度。理由は苦しみ、痛みがひどく、それから解放されたいため。また看護人(家族、看護婦、医師等)の苦勞を軽減したいため。第三は、死を人間の自然の成り行きと受けとめる態度。第四は、死を神のもとへの旅立ちと理解する態度。この第四の態度こそ、信仰者の望む死への態度である。近藤裕は、人にはそれぞれ「死に方のスタイル」があると述べて、8つの型をあげている^⑰。

(1) 否認型、(2) 逃避型、(3) 恐怖型、(4) 無感覚型、(5) 解放型、(6) 犠牲型、(7) 諦観型、(8) 受容型である。この中で望ましい死への態度は「受容型」である。それは「平安な心をもって自分の死を迎えることのできる人は

『死』と対面し、『死』を受け容れることのできる人である。……受け容れることによって死や苦難を征服する。つまり、死に背を向けず、正面から死と対座し、死と語り合うことが、死の刺を和らげ、死を超越することに通ずるといっているのである^⑩。精神科医であり、死への看護と積極的に取り組んでいる柏木哲夫は望ましい死について4つの点を述べている。(1) 真実を知った上での死。(2) 交わりのある死。(3) 身辺整理ができた死。(4) 死後の世界を思える死。柏木は、死にゆく人々への宗教の価値を積極的に認めている人のひとりであるが、信仰は死の受容へと至らせ、病苦の中にありながら平安を与える源泉になると述べている^⑪。

以上、四人の人々の考えを見てきた。ここで、キューブラー・ロスと柏木哲夫は医師の立場から意見を述べ、D・ウィリアムズと近藤裕は神学者・カウンセラーの立場から発言している。

次に、実際に死にゆく人々を教会する牧会者の立場から見ると、患者がどのような態度で死を迎えることが出来ればよいのか、つまり、願わしい死の在り方について考察してみたい。この小論の筆者は少なくとも三つあると考えている。(1) 救いの確信がある。(2) 生も死も主にゆだねざる態度。(3) この地上に「生」を受けたことを喜び、神と人々に感謝できる。以下簡単にふれてみよう。

A 救いの確信がある。

牧会者がはじめに願うことは、死にゆく人が救いの確信にしっかり立っていることである。罪人であった自分が、キリストの十字架の上での贖いのわざによって、罪なき者とされ、神の子とされているとの確信。病人は、身体的苦痛に加えて、精神的・社会的苦痛がある。その中で魂を支えていくものは、神の御手の中にしっかりと受け入れられているとの確信である。それは身体的・精神的・社会的苦痛の中にあって、霊的な平安と喜びと感謝を与えてくれるものである。

B 生も死も主にゆだねざる態度

死にゆく人々が、死の恐怖や不安から解放されるには、生も死もすべて主にゆだねざる以外にはない。生に執着している限り、死の恐怖からは解放されない。生も死も主の御手にゆだねきってしまうとき、死は生の終りではなく、新しい生の出発点に変えられていく。パウロは「生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものである」(ローマ14・8)と述べて、主の慈愛と恩恵に自からをまかせて生きたのである。

C この地上に「生」を受けたことを喜び、神と人に感謝できる。

死にゆく人々は、しばしば神を呪い、人々に不平を言い勝ちになる。口に出して言わないまでも、与えられた人生を心から喜んで受け入れ、感謝することはなかなか困難である。しかし、死という人生の総決算の時に、自らの生に喜びをもてず、神と人々に不平しか感じないとしたら、その人生は敗北でしかない。勝利した人生とは、人生の長短や苦難に関わりなく、与えられた人生に感謝できるか否かである。そこで、すべてのものを与えて下さった神と、地上での生活を共にすることができた家族や友人たち、看護にあたってくれた医師や看護婦への感謝の思いが、死にゆく人々にあることが願わしい。

以上三つの態度は、信仰に生き、信仰の中に死を迎えた人々の中に見る態度である^⑫。しかし、このような態度は、牧会者が願うところの態度であるが、強制されるべきものではない。牧会者が、死にゆく人々のために祈る「祈り」の内容である。

三 牧会者が扱う主要問題

死にゆく人々は、さまざまな問題をかかえている。牧会者はそのすべての問題に心を配らなくてはならない。最近、ホスピス運動が盛んに叫ばれているが、現在進められているホスピス運動は、英国のシデナム Sydenham のシリー・ソルダース Cicely Saunders の聖クリスタファー・ホスピス St. Christopher's Hospice に端を発している^②。このホスピスでは、痛みのコントロールにケアの主眼を置いている。この「痛み」とは 1 身体的痛み。2 精神的痛み。3 社会的痛み。4 宗教的痛み。以上4つの痛みからの解放である。ホスピスはこの4つの痛みを解決することで、残された人生を人間らしい尊厳を保ちつつ、有意義に生きることを目ざしている^③。

死にゆく人々に牧師が出会うとき、牧会者の責任は、宗教的痛みの解決だけに留まらない。死にゆく人々は、病気の戦いの中で諸々の問題に悩み疲れ、痛んで叫び声をあげて助けを求めているかもしれない。牧会的な観点からみると、牧会者の扱う大きな問題領域が三つあると考える。その三つとは、宗教上の問題、医師・医療に関する問題、最後に身辺的な問題である。以下説明を加えてみよう。

A 宗教上の問題

宗教上の問題こそ、牧会者の解決すべき責任である。大別すると次のように6つに分類できる。

(1) 苦難の理由について

例 「私は熱心に信仰に励んできたのに、なぜこんなに苦しまなければならぬのですか」。

(2) 神の存在について

例 「私は真面目にクリスチャン生活を送ってきました。なぜ、神様は私を苦しませるのですか。神様がいるなら、そんなことはなさらないはずですよ」。

(3) 奇跡の希求と奇跡の可能性

例 「神様は全能な方なので、私の病気を癒してほしいです」。

(4) 祈りについて

例 「祈りはなんでも聞かれますか」。

(5) 死後の世界について

例 「死後、私はどこへゆくのでしょうか」。

(6) 救いの確信について

例 「私は本当に神の国に入れるかどうか心配です」。

このような問題が牧会者が扱わなくてはならない問題である。これらの宗教上の問題は、牧会者の全責任がかかってくるものである。しかし、残念ながら、死にゆく人々の牧会の中で、これらの宗教上の問題が直接浮び上がってくることは非常に少ない。また宗教上の問題が患者の心の隅に湧いてきた場合にも、直接牧会者に問うことは少ない^④。その理由は、文化的要因が大きく作用していると思われるが、問題は患者と牧会者が忌憚なく話し合える信頼関係ができていくかどうかの問題だと思われる。牧会者が自分の牧師に宗教的問題を尋ねることは、信仰の弱さを示すことになりはしないかとの危惧が教会員に働いて尋ねにくくしている。疑いは疑いとして、また悩みは悩みとして正直に話し合える信頼関係が必要である。そこで牧会者は普段から何事についても話し合える信頼関係をつくり出す努力を

しておくことが重要である。

教会員が病院や施設等にあつて、宗教的な問題を問うてきた場合には、病氣との戦いの中で信仰の動揺をきたし、信仰の励ましを受けたいと間接的に語っているのかもしれない。教会者は病人の心のニーズを聞きとり、それに応えていかななくてはならない。

未信者が宗教的問題を問う場合には、「宗教を積極的に考えてみたい」、「出来たら信仰に入りたい」との意志表示かもしれない。教会者は相手の言葉に耳を傾け、心の奥底にある魂の声を聞かなくてはならない。

死にゆく人が、教会員であろうと、未信者に関わりなく、教会者は宗教的問題の奥の声を聞きつつ、魂のニーズに福音をもって応えていく必要がある。魂が神に向けられ神との真の交わりをもち、神の愛を信頼しつつ、すべてを神にまかせることが出来るようにと。

B 医師・医療に関する問題

死にゆく人々への牧会の中でしばしば話題となる問題に次のような問題がある。これを分類すると、三つになる。

(1) 病氣自体に対するもの——病氣の回復への不安や疑問、病氣の完治の可能性への疑問、病状の悪化への不安など。

例 「私は本当によくなるのでしょうか」(病氣の完治への不安)

「病氣が悪くなっている感じがします」(病氣の悪化への不安)

「私はガンでしょうか」(ガンへの恐怖)

(2) 医師、看護婦に対するもの——医師への感謝、不満、不信、看護婦の扱い方への感謝、不満など。

例 「この医者、へぼだ」(医師への不満、不信)

「医師が本当のことを私に教えていない気がする」(医師への不信、疑い)

「この看護婦は不親切だ」(看護婦への不満)

(3) 病院、施設に対するもの——病院、施設など環境への不満や感謝

例 「この病院は騒がしくて夜寝れない」(病院への不満)

医師、医療に関する問題が、教会者に向けられることがしばしばある。日本の医学界の現状では、末期ガン患者に対して病名をつけない傾向にある。医師も家族も沈黙を守る。患者は、牧師は真実を語ってくれると期待して、病名などを尋ねてくることがある。ここで、教会者が心に留めておかななくてはならないことは、病名を告げるか否かは、医師の責任であつて教会者の責任外のことであること。教会者のつとめは、患者に病名が告げられようが、告げられまいにかかわらず、神への信頼を失わず、御手にすべてをささげて生きるように援助することである。

また医師や病院の扱い方に満足していない場合、その不満や怒りを教会者につけてくることがある。病院の関係者には直接おつけることができず、抑圧しているからである。教会者なら聞いてもらえとの気安さ、安心、信頼があつて、病院関係者に言えないことをぶつけてくる。教会者は患者に同調する必要はないが、患者の心の中にある精神的、心理的苦痛に共感しつつ、その解消へと援助しなければならぬ。同時に、魂の霊的必要性に対して、福音をもつて霊的成長を促す援助も怠ってはならない。

C 身辺的問題

死にゆく人々の身の回りの問題が大きな苦痛になる。この問題は数え上げることができないほどに多い。ここで

は、しばしば問題になるものだけに限っておく。

(1) 自分自身のこと——死の恐怖、不安など。

例 「死ぬのが恐ろしい」。

例 「死んだあとどこへ行くのか不安です」。

(2) 家族のこと——子どものこと、夫婦のこと、両親・兄弟姉妹のことなど。

例 「子どもたちと別れるのが辛い」(別れの寂しさ)。

例 「家族に迷惑をかけてすまない」(家族への罪責感)。

(3) 仕事のこと——会社での仕事のこと、未完のまま残してきた仕事のことなど。

例 「仕事のことを気にする」。

死にゆく人々に限らないが、多くの病人は身辺の問題を多くかかえて思い悩む。自分自身の病気はもちろん、家族のこと、仕事のこと、死んでから後の事などに心を悩ます。悩んでも実際に自分で解決できない病人は、ついに無力感や罪責感をもつことになる。そこで牧会者は、病人の苦悩や痛みに共感的であると同時に、支持的であるべきである。カウンセリングの知識と技術が必要となるところである。しかしそれだけでなく、すべての問題の解決主である神への信頼を深めることで、すべての思いわずらいや心配を神にあげわたし、解放されるように援助すべきである。

四 死の積極的意味の再確認

死は人生の終りである。人生は二度とくり返すことはできない。死において、すべての可能性は閉ざされてしま

う。死にゆく人自身の夢も、家族的・職業的責任も、すべて未完了のままに終ってしまう。それは本人にとっても、周りの人々にとっても、悲しみであり、苦しみであり、痛みである。それでは、死には破壊の意味しかないのだろうか。死に直面した人がすべて、生きることを放棄して自暴自棄に陥るわけではない。生きる時間が限られることであって残された生命を充実して生きようとすることさえある^⑧。そのことは、死にも積極的意味があるということではないか。それでは死の積極的意味は何か。以下6つの点についてみよう。

(1) 死はすべてのものを相対化し、死にゆく人をして、絶対的存在を求めさせる誘因となる。

死に対するとき、それまで価値あった「社会的地位」、「財産」、「学歴」、「友人」もすべて絶対的価値をもたなくなる。この世のいかなる物も、死にゆく人を支えることはできない。そこで、人は死に直面してはじめて、時代や国をこえた絶対的な存在に目が開かれることができる。

(2) 死は人間の有限性に目ざめさせ、死にゆく人をして、永遠的存在を求めさせることができる。

死が迫りくるとき、たとえ本人が嘆願したとしても、寿命を一瞬たりとも延ばし得ない。そこで人は自分の力ではどうすることもできないもののあることを痛感する。すなわち人間の有限性を認識する。自分の有限性に気付かないうちは、人は高慢であり、虚しい努力に頼ろうとする。しかし、自分の有限性を知った者は永遠的存在である神を求めはじめる。

(3) 死は人間の平等性を教え、死にゆく人をして、神の愛の平等性に気付かせることができる。

すべての人は死ぬことが定められている。それは「財産」、「社会的地位」、「学歴」、「男女」などによって変わらない。いつ死ぬかは人によって異なる。人それぞれに定められた死ぬ時がある(伝道の書3・2)。しかし、すべての人は一度だけ死ぬことが定まっている(ヘブル9・27)。この世では、人によって異なるものが

多い。しかし、すべてのものが死ぬことにおいて平等である。神にはえこひいきはないのである。死はそのことを教えることができる(ローマ2・11)。

(4) 死は孤独を体験させ、死にゆく人をして、キリストの十字架の苦しみを体験させ、かつ復活の希望へと導びくことができる。

人間は孤独な存在である。けれども、人間が孤独な存在であることを死に面した時ほど実感するときはない。愛する家族といえども死の孤独を共有することはできない。死を経験するのは本人ひとりである。ただひとり死の恐怖と不安の中にあつて、目を上に向けてるとき、そこに死を共に経験してくださる励ましの主がいる。二〇〇〇年前に人の罪の贖いのために十字架上で苦しんでくださったイエス・キリストである。孤独のきわみに立ったとき、はじめて救い主イエスの十字架の苦難が実感をもたて理解でき、かつキリスト・イエスの復活の真の力を実感できるようになる。死につつありながら、復活の希望に満されることができる。

(5) 死は、死にゆく人に、生の終着と新しい生への出発を教えることができる。

死を宣告された人間は生きる望みを失うといわれる。しかし逆も、しばしば起っている。死を宣告されることで、かえって残された生をより充実させて生きようとする。つまり死は生の終着であるが、一層充実した新しい生への出発へと導びくこともできるのである。

(6) 死は、死にゆく人に、人生の虚しさに気付かせ、かつ価値ある人生を探求させることができる。

死が目前に迫るとき、人は人生の虚しさにおそわれる。同時に虚しさを克服する価値ある人生を求めさせはじめることができる。それは一時的にあらわれて過ぎ去るものではない。永遠へと続くものである。

以上、死がもつ積極的な意味を見てきた。死にゆく人も、牧会する者も、しばしば「生」に目を奪われて、「死」

の全体的姿を見ることをしない。「生」に価値を認めて、「死」のもつ積極的側面を見ない。人間は死に直面しなければ、この世の虚しいものに目を奪われて、絶対的存在である神を探求しようとしなないかもしれない。自分の力の無力さを徹底的に認識させる死は、同時に人間の相対性・有限性・不平等性・一過性を認識させる。それゆえに、死に直面している人をして、神の絶対性・無限性・平等性・永遠性に目ざめさせるきっかけとなるのである。死にゆく人への牧会者がこの点を理解しておくとき、死にある時にしかできない牧会への道が開かれてくるのである。

五 死にゆく人々への牧会者の在り方と責任

牧会者には、死にゆく人々を最後までケアする責任がある。この世に生命を与えられ、今死にゆく人は、神がそのひとり子を給うほどに愛して下さる人間である(ヨハネ福音書3・16)。現代の死が非人間化されればされる程、牧会者は死にゆく人々を「神のかたち」(創世記1・27)に創造された存在として尊重しなくてはならない。それも罪人の私たちを主・イエスが徹底的に愛してくださったように、死にゆく人を徹底的に愛する(ケアする)ことである。パウロは「弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを、福音のためにしています」(コリントI 9・22~23)と述べ、弱い者を得るためには、いかなることでもすると告白している。

死にゆく人々は、死への過程の中で何を体験しているのだろうか。近藤裕は死に臨む過程における感情的反応について次の6つをあげている。(1) 怒り、(2) 悲哀、失意、抑うつ感、(3) 罪責感、(4) 恥辱感、(5) 絶望感、諦観、(6) 安らぎ等である。これらの感情は、しばしば混り合っているから、牧会者は病人の心の動きに注意しつつ適切に

心のニーズをとらえ、それに応えていかななくてはならない。

- 牧会者が、死にゆく人々の霊的・精神的ニーズをとらえ、それに応えていくには、牧会者にどのような態度が求められるのであろうか。T・C・オデンは、牧会者とのべき態度を6つあげている。^②(1) 傾聴(ローマ12・15)、(2) 無条件の受容(ルカ7・36)、(3) 共感的態度(ヨハネ福音書11・34)、(4) 神の慰めの伝達(マタイ5・4)、(5) 誠実・正直(マルコ8・32)、(6) 裁かない(マタイ7・1)である。

この論文の筆者は、死にゆく人々の牧会において重要なのは、どのような態度をとるかと同時に、牧会者自身がどのような自己理解をもつかが根本的に重要だと考えている。^③死にゆく人々への牧会は技術というより、人間と人間のぶつかり合いの中でなされると思うからである。牧会する人自身の全存在が牧会の中に注ぎ込まれなくてはならない。全存在が関わってはじめて、死にゆく人々の実存にふれる慰めや励ましや希望が伝えられるからである。そして、牧会者自身といえども罪人にすぎない。死にゆく人々に向うとき、死の恐れや絶望感や無力感におそわれる。牧会者自身が聖霊のお取り扱いが必要な存在なのである。聖霊の御臨在の中で慰められ、励まされ、復活の希望が与えられるとき、その神の恵みの体験が、聖霊の助けによって死にゆく人々へと伝達されていくのである。牧会のわざは究極的には聖霊のわざである。牧会者は神から任命されて聖霊のわざに参加させていただいているのである。

この論文の筆者は、次の三つの自己理解が特に重要であると考えている。死にゆく人々への牧会者とは、自からを「罪人として理解」し、かつ「キリストの使節」としての使命を帯びて、死にゆく人々の苦悩を「共感する者」である。

A 罪人としての牧会者

牧会者が自からを罪人と理解することは、どのような意味があるのだろうか。牧会的観点から見てもみよう。

- (1) 死にゆく人の不必要な防衛機制を取り除く

牧会する者と牧会される者の間に心理的距離があってはならない。^④牧会する者が牧会される者の上に立つとき、牧会される者は真の自己を語ることはできない。

死にゆく人はしばしば罪意識に悩まされる。樋口和彦が指摘するように、「家族の世話ができない」、「人の世話になって申し訳けない」、「お返しができない」等の罪意識である。^⑤牧会者といえども、人生の中で常に神の御心に反することを言い、罪を犯している罪人にすぎない。それに加えて、人生の荒波の中で、牧会者自身が不安・恐れ・疑いにおそわれながら、ただ主の御恩寵にすがりながら生きているのである。

パウロは「私は罪人のかしら」である(テモテI 1・15)と言ひ、マタイは「取税人」であった。またペテロもカヤバの中庭でイエスを拒んだ人間である(マタイ26・69-75)。神の御計画によって使命を与えられた(コリントI 15・10、ガラテヤ1・15)、神の僕(ローマ1・1)として召されたのである。

牧会者も牧会される者も神の前には罪人であって、なんら変わるころはない。唯、神のゆるしと哀れみにすがるかその使命をはたす道はない。牧会者が罪人であるがゆえに、牧会される者は不必要な防衛機制から解放されることになる。

- (2) 悔い改めと許しへの可能性を開く

死にゆく人々にとって神への信頼にまざる救いはない。死にゆく人々は病床にあって、不安・恐怖・孤独の中にいる。その苦しみと痛みの中にあつて、苦しむ者を見捨て給わず共にいて、その苦悩や痛みを共に担ってくださる愛の神が給うのである。

牧会者も罪人であるにもかかわらず、許されて生かされていることは、牧会される者にも悔い改めと許しへ

の道を開くものである。「罪人のかしらである」(テモテ I 1・15)と告白したパウロが、「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです」(ローマ 10・9)と宣言している。神の前には、いっさいの罪はゆるされる(コロサ イ 2・13)。十字架の許しこそ、死にゆく人々の不安・恐怖・孤独の苦しみを解決して、神との霊的平安に生かされる道である(ローマ 8・6)。

教会者は必要な時には自からの救いの体験を率直に語り神の御恩寵を証しすべきである。教会者の証しは死にゆく人の信仰を励まし、神への信頼を深め、天国への希望を与えるものである。目に見える希望ではなく、目に見えないが究極的希望である。「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです」。(コリント II 4・18)

B キリストの使節としての教会者

だれにとっても死は未経験であり、死後の世界は全くの未知である。この未経験・未知が死への不安や恐怖の原因の一つとなっている。この見える世界にのみとらわれて、死後の世界へ関心を持たなかった人にとっては、死はたまらなくつらい。

パウロは自からを「キリストの使節」であると述べた(コリント II 5・20)。そこにパウロの自己理解があった。神からつかわれたものとしての誇りと責任感をもって十字架の福音を宣べつたえた。

教会者もまた「キリストの使節」である。彼の責任は、死にゆく人に、まず救いの確信を持たせるように援助することである。次に死後の世界への道を示すことである。キリストの福音こそ「ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信

じるすべての人にとって、救いを得させる神の力」である。そして確信がもてて次に死後の世界への出発点に立つ。しかし、死後の世界への道案内が必要である。「導く人がなければ、どうしてわかりましょう」(使徒 8・31)。教会者が聖書の教えに従って道案内とならなくては、だれがなることができるでしょうか。教会者こそ「キリストの使節」である。

C 苦しみの共感者としての教会者

人はひとりで生まれてこなかったように、死をひとりで迎えることはできない。死はひとりで耐えるには、あまりにも重すぎるのである。

キリストの教会のわざを見ると、そのわざの根底にあったものは、苦しんでいるもの、病んでいるもの、見捨てられたもの、孤独なものたちとの徹底した痛みの共感がある。死にゆく人々への教会者も、このキリストのわざに見習うべきである。死にゆく人々の苦悩や痛みを他人は同程度には体験することはできない。しかし死にゆく人々への愛をもって、誠実に耳を傾けていくとき、死にゆく人々の苦しみは分散させられていく。

主イエスは、この世で苦しみ悩んだ人は、天国において大きな祝福を受けるのは当り前だという。「子よ。思い出してみなさい。おまえは生きていた間、良い物を受け、ラザロは生きていた間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです」(ルカ 16・25)。主イエスの論理は、この世の論理と異なる。この世であわれに見える者が、むしろ神の祝福を受けることができるのだ。教会者が死にゆく人々の苦しみや痛みを共感することは、実は神の祝福をも共感することになる。

「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなむ」(ローマ 12・15)。ここに真の教会者の姿がある。

最後に、今、病いを負って苦しんでいる兄弟姉妹に対して、聖書の約束をもってこの論文を閉じたいと思う。「あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあつてその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神」自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全に、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます」(ペテロI 5・10)。

注

- ① この論文は昨年秋(一九八二年十一月)の福音主義神学会西部部会九州地区研究発表会で発表した論文に加筆したものである。
- ② 末期ガン患者の治療(cure)と看護(care)の問題、尊厳死の問題など新聞、雑誌などが取り上げている。
- ③ 死の臨床研究会が、医師・看護婦・心理学者・ケースワーカー・法律家を中心に発足し、第一回研究発表会を一九七七年十二月に開いている。
- ④ 死の研究の直接対象として取り上げ、死にゆく人の内的世界を明らかにしようとはじめたのは最近である。そのはじめは、元シカゴ大学の精神科教授であったキューブラー・ロス Elisabeth Kübler-Ross である。邦訳されたものは『On Death and Dying 川口正吉訳「死ぬ瞬間」』読売新聞社、一九七一年、Questions and Answers On Death and Dying 川口正吉訳「死ぬ瞬間の対話」読売新聞社、一九七五年等々。
- ⑤ 原崎百子「わが涙よ、わが歌となれ」、新教出版社、一九七九年、松藤守男・敏子「死にいたるまで」、ヨルダン社、一九八二年、西川喜作「輝やけ、我が命の日々よ」、新潮社、一九八二年、吉岡昭正「死の受容」、毎日新聞社、一九八〇年、小川、中井編「詩集 病者・花——細川宏遺稿詩集」、現代社、一九七七年
- ⑥ 山本八重子「ありがとう純子」、いのちのことは社、一九八三年、大宮博等「死の陰の谷を歩むとも」、日本基督教団出版局、一九八三年
「聖隷ホスピス」、一九八三年、長谷川保「老いと死をみとる」、柏樹社、一九八二年、柏木哲夫「生と死を支える」、朝日新聞社、一九八三年、若林一美「安らかな死のために——ホスピス」、現代出版、一九八二年
- ⑦ 日本経済新聞社編「聖隷ホスピス」、一九八三年、長谷川保「老いと死をみとる」、柏樹社、一九八二年、柏木哲夫「生と死を支える」、朝日新聞社、一九八三年、若林一美「安らかな死のために——ホスピス」、現代出版、一九八二年
- ⑧ 死の臨床研究会(神戸市垂水区旭ヶ丘二の三の七 河野胃腸科外科医院内)、日本バリエーション研究会(福岡市中央区天神一の四の一 西日本新聞会館内 日本心身医学協会気付)
- ⑨ 樋口和彦「死に対する教会配慮」、「病む人と共に」、日本基督教団出版局、一九六六年、九三—九九頁
- ⑩ 尾山令仁「死への備え」、いのちのことは社、一九七三年を参照。
- ⑪ 病人に病名を告げるべきか否かについて日本ではほとんどの医師は告げないのが現状である。しかし、告げることのメリット、デメリットが色々議論されている。聖隷ホスピスの原義雄ホスピス長は次のように述べている。告げた場合のメリットは、① 治療に協力してもらえ、② 死について共に話せるようになる、③ 死の準備をさせることができる、④ 患者が残された短い生涯を最も有意義に送ることができる、⑤ 無用の気遣いや緊張が不要となる、⑥ 病名を告げられて平静になることが多い、など。デメリットは、① 不安と動揺に追い込み、死期を早め、時に自殺を計る人もいる、② 希望を失い生きる意味・闘病の意味を失うことがある、など。結局、どんな人には告げるのか。① 宗教、信仰、あるいははっきりした死生観をもっている人、② ライフ・ワークをもっている人、③ 精神的に支えうる温かい家庭のある人、④ ある程度、子供も成長し、地上でなすべき仕事がかかり出来ている人、など。池見西次郎・永田勝太郎編「死の臨床」、誠信書房、一九八二年、一〇一—一一頁。
- ⑫ 現在米国では九七％の医師が癌を告げているが、我が国では一六・九％でしかない。池見・永田編 同書、五頁。
- ⑬ 柏木哲夫「生と死を支える」、朝日新聞社、一九八三年によると「われわれの調査でも七二・四％の人が自宅での死を望んでいる。病院で死を迎えたいと思っている人はわずか一三％である。しかし現実には、昭和55年度の厚生省人口動態統計によると、五七％の人が、また東京都では七〇・九％が病院や施設で死亡している」。一〇〇—一〇二頁。
- ⑭ 聖書の死生観には三つある。① 罪の罰としての死。創世記3・19、出エジプト記21・7、ローマ5・12、6・12、13、ヘブル13・12等。② 生の終りとしての死(自然的なもの)。ヨブ21・32、詩篇49・12、IIコリント5・1等。③ 益としての死(死によってキリストと共にいる可能性が生ず)。IIコリント5・8、ピリピ1・21、23等。

- ⑮ D. D. Williams, *The Minister and the Care of Souls*. 窪寺俊之訳「魂への配慮」日本基督教団出版局、一九八一年、二一三頁。
- ⑯ ローマ 6・3—11
- ⑰ テモテⅡ 4・7—8
- ⑱ Elisabeth Kübler-Ross, *On Death and Dying*. 川口正吉訳「死ぬ瞬間」、読売新聞社、一九七一年、四〇頁。
- ⑲ D. D. Williams 前書、二一四頁。
- ⑳ 近藤裕 「自分の死」入門、春秋社、一九八二年、四一—六一頁。
- ㉑ 同書、五二頁。
- ㉒ 柏木哲夫 「尊厳死——望ましい死のむかえ方」、池見・永田編 前書、一〇〇—一〇一頁。
- ㉓ 柏木哲夫 「死にゆく人々のケア——末期患者へのチームアプローチ」、医学書院、一九七八年、五八—七七頁。「生と死を支える——ホスピス・ケアの実践」、朝日新聞社、一九八三年、六九—七四頁。柏木は、「生と死を支える」の中で次のように述べている。「一般的にいって、信仰の有無は人の死にさまに大きな影響を与える。信仰を持っている人の死は、概して安らかである。信仰を持っている人にも、身体的な痛みや苦しみは同じようにやってくる。しかし、その痛み、苦しみに対する態度が変わってくる」。六九頁。
- ㉔ 柏木哲夫 「死にゆく人々のケア」、六七頁。
- ㉕ 原崎百子の前書、松藤守男・敏子の前書、山本八重子の前書を参照。
- ㉖ Thelma Ingles, "St. Christopher's Hospice", Michael Hamilton and Helen Reid, *A Hospice Handbook*, William B. Eerdmans Publishing Company, 1980, pp. 47~57. 英国のホスピスについては、季羽倭文字 『英国の癌末期患者の看護』「死の臨床」2号、死の臨床研究会、一九七九年、九—十一頁。柏木哲夫 『イギリスのホスピス』「死の臨床」3号、十四—十五頁。
- ㉗ K. P. Cohen, *Hospice*, Aspen Systems Corporation, 斎藤武・柏木哲夫共訳「ホスピス」、医学書院、一九八二年、「末期患者のケアでもっとも大切なことは痛みの軽減である」、一三四頁。
- ㉘ 同書 「ホスピスの主たる目的は症状の緩和で、そうすることにより患者が可能な限り安らかに価値ある人生を生きぬくことができる」、六頁。
- ㉙ 原義雄 前書の一〇六頁で次のように述べている。「欧米では、信仰的な痛みのコントロールをあげているが、日本ではこの点はほとんど問題にならないのが現状である」。原のことは、宗教的痛みを無視してよいと主張していると理解すべきではない。宗教的な問題が話題となり解決課題となることが少ないという事実を述べていると解すべきである。そこに日本のホスピスの現状があり、かつ死にゆく人々の姿がある。また死に直面した場合に、病人に病名をつけることのできない原因は、宗教的、バックボーンの欠如と、死への備えがないことによる。
- ㉚ 原崎百子の前書、松藤守男・敏子の前書、西川喜作の前書を参照。
- ㉛ 近藤裕 前書、一三三—一四二頁。
- ㉜ Thomas C. Oden, *Pastoral Theology*, Harper and Row, 1982, p. 298.
- ㉝ D. D. Williams 前書、一四六—一六四頁。
- ㉞ Theodor Bovet, *Lebendige Seelsorge*, Paul Haupt Verlag, Bern, 松村克己訳「魂への愛と慰め」、ヨルダン社、一九七三年。「牧者は本当の人間でなければならぬが超人ではない……人は兄弟には信頼をよせ得るが、自分たちの困窮に超然として「教会の」塔のように高く立っている人には信頼しなむ」。二九五頁。
- ㉟ 樋口和彦 『精神療法における「死」の宗教的問題』『季刊精神療法』vol. 5 No. 1, 1979, P.19.
(独立折尾キリスト教伝道所牧師)